

「書店の未来」

私が若いころ、音楽を聴くにはレコードが必要でした。レコードを買ってきて、ステレオに付いたプレイヤーを使って針をレコード盤に落とします。最初プチプチと雑音が入りますが、いよいよ曲が始まる緊張感が高まって、悪いものではありませんでした。

レコードは新品でもよく音が飛びました。急に何小節か先に行ってしまうのです。そのようなときは針の上に10円玉を載せて少し重くしたりしました。それでも直らなければ返品しなければいけません。返品するとお店でレコードを試します。そこで音が飛ばなかったりすると「お客様のレコード針のせいじゃないですか？」と言われてたりもします。

その後CDやMD、いまは配信となって音質は格段にアップしました。それでもレコード人気は少ないながらもいまだに根強いようです。ノイズが音楽の要素になっているのでしょうか。好きな人は高いステレオを購入して聴いています。

AIが小説を書けることは明らかです。日に日に技術は進歩しています。面白いのならAIの小説を読むことにあまりためらいはありません。作家さんの生活を守るため、データの基になった作家さんの収入は確保してほしいです。それでもAI本が現在の本より安価になることは確実でしょう。

本屋さんには安価なAI本がたくさん並ぶことになるのかもしれませんが。技術の進歩により、電子データで陳列された作品を、購入する際に印刷・製本したり、データのまま受け取ったりすることが当たり前になるのかもしれませんが。

それでも書店にはきっと「人間の作家」の本が並ぶ一角も残ると思っています。レコードのように人間の書く本にはAIにはできない要素、いわば「ノイズ」があると思います。これがないと面白くないと考える人も必ずいるはずです。だからこそAIに仕事を奪われると才能がある人が作家をあきらめるようなことがないように願っています。

AIの安価な本が普及すれば、買える人も増えるし、読書の習慣が広まるかもしれません。できれば字を読むのが良いと思いますが、人によっては「オーディブル」のように聞いて楽しむ形でも良いと思います。文章から情景を想像することは脳にとって大事なことでと考えています。

AIと人間の作家が共存して、いま苦境に立たされている書店がアミューズメントゾーンとして人々の憩いの場になってくれるといいなと思います。業態を変革しながらぜひ書店には生き残ってほしいです。書店がなくなる未来は私にとって暗黒の未来です。